2008年（平成20年）9月発行

Global COE Program

お茶の水女子大学 グローバルCOEプログラム

格差センシティブな人間発達科学の創成

ニュースレター　第2号

2面 2008年度上半期の活動報告
3面 公開講座開催／第１回発達追跡研究のための多変量解析セミナー開催
4面 お茶の水女子大学グローバルCOEプログラム出版物／開催予定

拠点リーダー挨拶

お茶の水女子大学グローバルCOEプログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」も、早くも2年目を迎えました。一部国際公募を行った若手研究者雇用のための選考作業も終わり、事業推進担当者に加えて、2008年9月には特任准教授1、特任講師1、特任助教1の体制が整いました。研究と業務に従事してくださる特任リサーチフェロー、特任アソシエートフェローの皆さんも、合わせて8人を数えます。

若手研究者を育てるためのプログラムが、公募研究や特任教員による授業、セミナーをはじめとして何本も走っています。養育環境格差、教育・社会的格差、国際的格差という3つの領域の格差研究も軌道に乗り、同時にディシプリンを越えた総合的調査研究もスタートしました。それらは、各種研究報告として、またシンポジウムやセミナーの報告書として、そしてなによりも大学院生や若手研究者の研究業績や研究活動の形で、実を結んでいくものと思います。

昨年度実施した第1回外部評価委員会の指摘も踏まえて、ユニークで国際的な拠点形成に向けて、一致団結して邁進していきたいと思います。皆様のご支援、ご指導を期待しています。

拠点リーダー　耳塚寛明

若手研究者（大学院生）支援事業の概要

若手研究者の支援事業は教育プログラム委員会が担当しています。

RAの採用は、大学院生の生活支援を主眼とした事業です。自分で立てた研究計画を遂行することを業務とし、原則として週2日の勤務に対して月10万円を支給します。在籍年数が長い院生ほど採用選考にあたって業績の多寡や質を考慮します。2008年度は39人を採用しました。

公募研究は、大学院生の研究活動支援を主眼とした事業です。優れた成果が見込まれる研究に対して50万円を限度に補助します。2008年度は19件を採用しました。研究成果は、翌年度始めの成果報告会で口頭発表のうえ、『公募研究成果論文集』または所属する学会の機関誌に論文を投稿していただく形で公表します。

協働研究は、研究世界と実践世界との異質性、緊張関係を前提としたうえで、両者が協働＝コラボレートする研究体制のことを指します。学校や福祉、子育て、途上国支援等の現場における参与観察、補償教育実践、学習指導などを含みます。このような研究を実施する院生に対して、1回につき10万円（海外での実施の場合は20万円）を上限として補助することにしています（随時受け付け）。

研究発表支援は、院生が学会発表を行うにあたっての旅費を支援するものです。1回目の募集に応募した院生は6名で、うち5名に補助を行いました。

以下は昨年度に公募研究を実施した3人の大学院生の感想的報告です。

● 松田典子さん

派遣労働という雇用形態について、特に女性の一般事務職の派遣労働者の働き方について研究しています。公募研究では、女性の派遣労働者の仕事構造と満足度を知るために、派遣労働者に対するアンケート調査を実施致しました。派遣労働者は正社員を希望しながら、やむを得ず派遣で働いている人も多い中、派遣から正社員になる可能性やどのような点が不満なのかを調査から知ることができ、実際の仕事との関係を分析しました。派遣労働者を対象にしたデータが少ない中で、公募研究での調査で実態を知ることができました。

● 宮田倫子さん

私は、政治と教育の問題について、ドイツの戦後政治教育思想に依拠しながら研究を進めています。公募研究は、博士論文執筆への意欲を高めるのに役立ちました。GCOEから御支援いただき、久々に現地での資料収集を行いましたが、事前にインターネットで探していたものだけでなく、さらに、公募研究以後の自分の研究に役立つような資料も多く入手できました。また、ドイツの政治教育研究の最新動向を把握することもできました。GCOEの成果報告会や成果報告書論文は、これまでの自分の研究を振り返るとともに、今後の研究の方向性を明確にするいい機会になりました。ありがとうございました。

● 渡辺亜紀子さん

私の研究では、都内の児童厚生施設職員等を対象とした質問紙調査およびインタビューの実施を計画していました。比較的規模の大きな調査であったため、費用の捻出が課題でした。今回の公募研究では、主に、印刷費・発送作業やデータ入力に必要なアルバイトの人件費に使わせていただくことができ、大変助かりました。おかげ様で、予想以上に多くの対象者からの協力を得たため、現在もデータ分析を継続中ですが、一区切りした分を研究ノートとして提出することができました。この機会を与えてくださり、心から感謝申し上げます。

2008年度　上半期の活動報告

国際シンポジウム

第2回　東アジア〈子ども学〉交流プログラム
「子どもの成長・発達と生活環境―子ども学的アプローチ―」

開催日： 2008年4月19日（土）9:50~16:30、20日（日）
会　場： お茶の水女子大学　理学部3号館701室

●●●

開会ご挨拶　小林　登（CRN所長）
講演1：小皇帝の真実
朱　家雄（華東師範大学教授）
講演2：脳科学と幼児教育
秦　全亮（浙江師範大学杭州幼児師範学院院長）
講演3：小皇帝の先生の養成
黄　紹文（長沙師範専科学校）
シンポジウム1：日中の子どもたちを深く知るためには
シンポジスト：榊原洋一、朱　家雄、秦　全亮、黄　紹文、内田伸子、一見真理子、山本登志哉、一色伸夫

●●●

講演1：日中比較の中で見えてくる「文化としての子どもの発達」
山本登志哉（早稲田大学教授）
講演2：日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ
首藤美香子（お茶の水女子大学）
講演3：幼児教育における日中関係史・比較史のスケッチ
―うかびあがる諸問題―
一見真理子（国立教育政策研究所総括研究員）
シンポジウム2：日中の子ども、幼児教育について
シンポジスト：内田伸子、秦　全亮、朱　家雄、黄　紹文、榊原洋一、一見真理子、山本登志哉、首藤美香子

東アジア子ども学国際シンポジウムは2日間、延べ400名を越える参会者を集め、日中の子どもを知るための熱い議論が展開された。日中の発達心理学、小児医学、神経心理学、幼児教育学、児童文化論、子ども社会学の研究者が話題提供し、その話題を糸口にして、日中の子どもたちを深く知ろうという試みである。日本で、2007年3月に放映されて話題となったNHKスペシャル「小皇帝の涙」を中国の幼児教育関係者や現場の教師たちはどう見たのか。朱家雄教授（華東師範大学）の基調講演で「小皇帝の真実」（中国からの真実）が明かされていった。学業成績だけが子どもの評価の最大・唯一の物差し。6ポケッツにより過重な期待を背負わされた中国の小学生のけなげな生活をどう捉えるか日中の評価はまるで違う。2日間の議論を通して日中それぞれの目を覆っている子ども観・教育観を析出することができた。また、教育の営みは、子ども一人ひとりの心理や生理の発達の視点に立たねばならず、教育⇔共育⇔協育であるとの共通認識に立つことができた。

公開シンポジウム

「子どもの暮らしの安全・安心～命の教育へ」

開催日： 2008年5月25日（日）13:00~17:00
場　所： お茶の水女子大学　徽音堂
報告者：
1. 幼児の安全教育への取り組み　髙木友子（湘北短期大学）
袖井孝子（お茶の水女子大学）
2. 未知人物の特性推論能力の発達過程　清水由紀（埼玉大学）
内田伸子（お茶の水女子大学）
3. 幼児の危険認知の発達―安全教育　内田伸子（お茶の水女子大学）
小林　肖（お茶の水女子大学）
4. 児童の安全教育―命の教育　竹田久美子（横浜国際福祉専門学校）
袖井孝子（お茶の水女子大学）

●基調講演
命の教育
日野原重明先生
（聖路加国際病院理事長）

グローバルCOE「格差センシティブな人間発達科学」拠点主催の公開シンポジウム「子どもの暮らしの安全・安心～命の教育へ」が開催された。シンポジウムは2部からなる。

第一部では、子どもの安全環境の実態調査（袖井孝子名誉教授・髙木友子湖北短期大学准教授）と子どもの危険回避能力の発達（内田伸子副学長・清水由紀埼玉大学准教授）についての3年間にわたるプロジェクト研究の成果が報告された。これを踏まえて、子どもの暮らしの安全・安心を誰がどのように守るか、幼児期からの安全教育はどうあるべきかについて、提言がなされた。

第二部では、子どもに対して命の大切さを説いている聖路加病院名誉院長の日野原重明先生の「子どもへのいのちの教育について」と題する基調講演に続き、200名を越える参会者を巻き込んで、子どもの暮らしの安全・安心をめぐる活発な討論が行われた。シンポジウムの締めくくりには、六年前に日野原先生から「命の教育」の授業を受けた附属中3年の桜庭　聡くんが「日野原先生は小学3年生のときに命の時間をどう使うか考えさせてくださった。今ぼくは、ぼくの命の時間をどう使うかについて探しているところです。先生、素敵なご講演をありがとうございました」と花束を贈呈した。会場は感動に包まれて締めくくられた。

公開講座『格差とは何か』（全3回）開催

2008年6月14日（土）、21日（土）、28日（土）の3回にわたって、グローバルCOE主催の公開講座「格差とは何か」を開催いたしました。
場所：お茶の水女子大学　共通講義棟2号館101室

3つの格差領域（①国際的格差、②教育・社会的格差、③養育・環境格差）から、各領域の研究担当教員が講義を行ない、延べ272名の方が受講されました。（担当責任者　特任准教授　池田まさみ）

第1回　国際格差領域から
司会　内田伸子

①榊原洋一
『日本の経験を発展途上国で生かす』
小児科医としてアジアやアフリカでの国際医療協力事業に携わってきた経験から、国際協力を行ううえで必要な視点について私見を交えながら述べた。適正技術、持続可能性といった基本的な援助内容と、被援助国であった日本の経験の意味などについて強調した。

②大森美香
『格差とはなにか－
健康 健康心理学からのアプローチ』
「格差」を社会経済的地位(SES)の差異としてとらえ、健康心理学的な視点からSESがいかに健康に関連するかを論じた。「健康」な社会の実現のため、健康行動の理論をアクションに変換し、介入の実践および政策策定に働きかけていく必要があり、領域横断的な取り組みが必須である。

第2回　養育・環境格差領域から
司会　菅原ますみ

①篁　倫子
『発達障害の子どもと教育・養育』
障害は「格差」を生じさせる要因である。知的障害、自閉性障害、学習障害、注意欠陥多動性障害などの発達障害のある子どもたちが被る格差を最小限にとどめるために、適切な教育支援や養育が必要となる。講義では発達障害とわが国の特別支援教育を概説すると同時に、極低出生体重児と発達障害に関する演者の長期追跡研究の結果を紹介した。COE研究では発達障害の子どもへの社会的認知・医療保健・教育の国際比較、および子どもの養育環境と親のQOL等について実態調査を行う予定である。

②小西行郎
『発達障害児は造られる』
最近急激に増加している発達障害について、その原因として新自由主義による、成果主義や効率主義の導入によって作り出されたものではないかと考えた。こうした子どもたちは親の育て方や環境の変化によって起こるのではなく、異質なものを受け入れられなくなった日本社会の変化によるものであると考えられる。それはアメリカやイギリスの発生頻度がスウェーデンのそれとあまりにも違うことからもみてとれる。つまり発達障害は社会によって造られたものといえるのではないだろうか？　発達障害の診断方法のあいまいさがそれを許したのではないかと思われる。新しい科学的な診断方法の確立が必要であろう。

第3回　社会的格差領域から
司会　耳塚寛明

①耳塚寛明
『学力格差への接近〈問い〉から考える』
だれが学力を獲得するのか。それは、教授学的な問いであると同時に、人々の地位達成過程を明らかにし、また社会成層(social stratification)の有り様を理解する上で、欠くことのできない社会学的な問いでもある。この講義では、この問いに関わる社会学的課題を整理し、またJELS (Japan Education Logitudinal Study)を用いて実証的な検討を行った。

②小玉重夫
『格差社会と能力主義：教育思想の視点から』
この講義では、格差社会と能力主義の関係を教育思想の視点から考察した。まず、格差社会をジル・ドゥルーズが「規律社会から管理社会への移行」として概念化した社会的文脈の中に位置づけた。そしてそれをふまえて、格差社会における能力主義はもはや社会的包含の機能を十分に果たすことが困難になり、社会的排除層を生み出しつつあることについて考え、議論した。

第1回　発達追跡研究のための多変量解析セミナー
「回帰分析とその関連手法」

2008年6月16日（月）、23日（月）、30日（月）の3回にわたって、「重回帰分析と変数選択」、「非線形関数を用いた回帰分析」、「ロジスティック回帰分析」についての統計セミナーを開催いたしました。
【講　師】室橋弘人（お茶の水女子大学人間発達教育研究センター、アソシエイトフェロー）
松本聡子（お茶の水女子大学人間発達教育研究センター、リサーチフェロー）

セミナーでは多変量解析法の中でも基本的な位置づけにあり、広範な領域において利用されている手法である回帰分析を取り上げて、解説を行いました。分析を行う際に気をつけるべき点は何か、ソフトをどのように利用すればよいのかといった点に的を絞り、「実践的でとても勉強になりました」といった好評を頂きました。また、変化を検討するための方法として重要である縦断研究の特性についての紹介も行いました。各回30～40名ほど、のべ113名の方が受講されました。

お茶の水女子大学グローバルCOEプログラム出版物

1 **お茶の水女子大学グローバル** COE **プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」** PROCEEDINGS 01 SELECTED PAPERS **(英文モノグラフ)、**2008 **年** 3 **月、**pp. 151。

2 **お茶の水女子大学グローバル** COE **プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」** PROCEEDINGS 02 SEMINARS & SYMPOSIA **(シンポジウム・セミナー報告書)、**2008 **年** 3 **月、**pp. 134。

3 **お茶の水女子大学グローバル** COE **プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」**PROCEEDINGS 03 Grant-In-Aid Research Awards **(公募研究成果論文集)、**2008 **年** 8 **月、**pp. 112。

4 **お茶の水女子大学グローバル** COE **プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」「カンボジアにおける幼児教育に関する調査報告書」、浜野　隆(研究代表者)、**2008 **年** 2 **月、**pp. 84。

5 **お茶の水女子大学グローバル** COE **プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」「青少年期から成人期への移行についての追跡的研究** JELS **第** 11 **集　A エリア** Wave2 **調査報告」、耳塚寛明(研究代表者)、**2008 **年** 3 **月、**pp. 243。

6 **お茶の水女子大学グローバル** COE **プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」中間報告書「社会人女性大学院生はどのような学びを求めているか－質問紙調査に向けて－」、三輪建二(研究代表者)、**2008 **年** 3 **月、**pp. 127。

7 **お茶の水女子大学** 21 **世紀** COE **プログラム「誕生から死までの人間発達科学」**
第 1~6 **巻、**2006–2008 **年、金子書房。**
第 1 **巻「誕生から死までのウェルビーイング－老いと死から人間の発達を考える－」内田伸子編著、**2006 **年** 4 **月、金子書房、**pp. 205。
第 2 **巻「リスク社会を生き抜くコミュニケーション力」内田伸子・坂元　章編著、**2007 **年** 4 **月、金子書房、**pp. 196。
第 3 **巻「子どもの発達危機の理解と支援－漂流する子ども－」酒井　朗・青木紀久代・菅原ますみ編著、**2007 **年** 9 **月、金子書房、**pp. 208。
第 4 **巻「学力とトランジッションの危機－閉ざされた大人への道－」耳塚寛明・牧野カツコ編著、**2007 **年** 12 **月、金子書房、**pp. 206。
第 5 **巻「ミドル期の危機と発達－人生の最終章までのウェルビーイング－」藤崎宏子・平岡公一・三輪建二編著、**2008 **年** 5 **月、金子書房、**pp. 284。
第 6 **巻「死の人間学」袖井孝子編著、**2007 **年** 8 **月、金子書房、**pp. 270。

開催予定

国際シンポジウム

テーマ：東アジアにおける学力格差の現状と政策課題

日　　時：2008 **年** 12 **月** 14 **日(日)**
場　　所：お茶の水女子大学理学部 3 **号館** 701
講　　師：中国　北京師範大学教育管理学院　杜　育紅(教授)
韓国　高麗大学教育学部　Kyung-keun Kim **(教授)**
日本　お茶の水女子大学人間発達教育研究センター
垂見裕子(特任助教)
コーディネータ：
お茶の水女子大学　耳塚寛明(教授、拠点リーダー)
使用言語：日本語・英語(日英同時通訳)

本年度のテーマは、東アジアにおける学力格差問題。中華人民共和国では、北京師範大学に国家教育部直属の基礎教育質量観測センターが設置され、地域的な学力格差の測定を視野に入れた全国調査の準備が進みます。大韓民国では政権交代に伴い、いったんは廃止されていた全国一斉学力テストが復活しました。学力格差の趨勢と背景を探り、政策課題を検討するため、中国、韓国からスピーカーを招聘します。皆様のご来場をお待ちしております。

日本パーソナリティ心理学会第 17 回大会

2008 **年** 11 **月** 15 **日(土)、**16 **日(日)の** 2 **日間に、お茶の水女子大学にて、日本パーソナリティ心理学会第** 17 **回大会が開催されます。本大会では、口頭やポスターでの研究発表、シンポジウムやセミナーに加えて、**3 **件の招待講演を予定しています。これらの招待講演のうち、アイオワ州立大学の** Craig A. Anderson **教授による「メディア暴力と攻撃的パーソナリティの発達(**Media Violence and the Development of Aggressive Personality**)」は、お茶の水女子大学グローバル** COE **プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」が共催しています。**Anderson **教授は、メディア暴力研究における世界的第一人者であり、本講演ではメディア暴力に繰り返し接触することが攻撃行動や攻撃的パーソナリティに及ぼす影響およびこうした影響を統合的に説明する「攻撃性の一般モデル」についてお話いただく予定です。**

なお、本大会についての情報の詳細は、
Web **ページ(**http://www.jspp17ocha.org/**)をご覧ください。公開シンポジウムのみの参加は無料です。**

編集後記

ニュースレター第 2 **号をお届けします。活発な研究活動を反映して、各領域の活動報告、シンポジウム・公開講座の報告、**Proceedings **他の報告書刊行など、盛りだくさんの内容になっています。これからの事業についての情報(東アジアの学力問題)も掲載されていますので、ぜひ目を通していただきたく思います。**
編集責任者：三輪建二、李　美静

発　行
お茶の水女子大学　グローバル COE　**プログラム**
「格差センシティブな人間発達科学の創成」
〒 112-8610　**東京都文京区大塚** 2–1–1
グローバル COE **事務局**
Tel/Fax: 03–5978–5247
E-mail: jimu-gcoe@cc.ocha.ac.jp
URL: http://ocha-gaps-gcoe.com/